

食卓生活史の調査と分析 : 食卓生活史の聞き取り調査

著者	井上 忠司
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	016
ページ	55-63
発行年	1991-12-25
URL	http://doi.org/10.15021/00003580

Ⅱ 食卓生活史の調査と分析

1 食卓生活史の聞き取り調査

井 上 忠 司*

1・1 基本的な枠組み

この調査の目的は、明治以来わが国の家庭では、どのような形式でふだんの食事がなされてきたかをしらべることをとおして、家庭生活の変化の実態をあきらかにしようとするにある。「家庭の食事にかんするライフ・ヒストリー調査」は、そんなねらいにもっともふさわしい方法のひとつとして、考えだされたものである。以下、調査のあらましをのべることにしよう。

かつて梅棹忠夫は、「食事学入門」(1980)¹⁾のなかで、食事文化の研究対象を、音楽のアナロジーをもちいて2つにわけてみせた。梅棹の用語にしたがえば、1つは「芸食」であり、もう1つは「民食」である。

音楽の世界では、民衆の日常生活にそくした素朴な歌が「民謡」であるのにたいして、芸術性のたかい歌のことは、とくに「芸謡」とよばれている。のちには民謡がだんだん芸謡化してゆき、両者の区別はいささかあいまいになった。が、もともと芸謡と民謡とのあいだには、はっきり違いがあったものである。おなじように、食事の世界にも二つの区別があるだろう。それが、さきの「芸食」と「民食」である。つまり、われわれがレストランや料亭でたべる食事は、いわば芸術性のたかい「芸食」であって、家庭で日常たべるお惣菜料理のような食事は「民食」である、というわけである。

もっとも、「芸謡」を鑑賞するのも、「民謡」をうたうのも、われわれの音楽生活の一部ではある。レストランで「芸食」をたべるのも、家庭で「民食」をたべるのも、ともにわれわれの食生活の一部であって、一方だけで現代日本人の食事を論ずることはできない。従来の食事文化の研究は、ややもすると「芸食」にかたよっていて、「民食」が軽視されがちであった。これはあきらかに、文字どおり、片手落ちであるといわなければならない。日本人の食事をうんぬんする以上は、この「民食」の実態を、

* 甲南大学文学部 国立民族学博物館 第1研究部 (客員)

1) 梅棹忠夫, 1980, 「食事学入門」梅棹忠夫ほか『食事の文化 世界の民族』朝日新聞社。(のち梅棹忠夫, 1989, 『情報の家政学』ドメス出版に収録)。

もっとよく把握する必要がある。

上記のような論旨に、われわれもほぼ賛成である。あるいは、民俗学の用語にならって、芸食を「ハレ」の食事、民食を「ケ」(ふだん)の食事と、言いかえることもできるであろう。だが、「芸食」(ハレの食事)と「民食」(ケの食事)という軸は、食事文化のおおう対象の半面にすぎないのではあるまいか。

食事文化には、もうひとつ、別の軸もあるようにおもわれる。「家庭内の食事」と「家庭外の食事」というわけ方が、それである。われわれは略して、それぞれ「肉食」と「肉食」というふうによぶことにしたい、とおもう。

ちなみに「肉食」ということばは、すでに肉食産業などという用法も定着していて、われわれの耳にもおなじみである。しかし「肉食」のほうは、耳で聞くかぎり、まだまだ奇異にひびくかもしれない。それはあたかも「内職」ということばこそ、われわれになじみぶかいけれども、「外職」ということばがっこうになじまないのと、ちょうど逆である。一般に、仕事は家庭のソトでなされ、食事は家庭のウチでつくり、家庭でとるのが常態である、と考えられてきたからであろう。

以上の2つの軸を、「芸食-民食」をタテ軸にとり、「肉食-肉食」をヨコ軸にとって、交差させてみることにしよう。すると、そこには4つのカテゴリーが浮かびあがってくる(図1)。それらのひとつひとつが、すなわち、食事文化の研究領域にほかならない。言いかえれば、食事文化の研究対象は、2つではなくて、この4つなのである。

ここで典型的な例をあげて、4つのカテゴリーを説明しておこう。

「芸食-肉食」のカテゴリーは、高級レストランや料亭に代表されるような食事である。それにたいして、「民食-肉食」は、ラーメン屋やそば・うどん屋のたぐいに

代表されるような食事である。いっぽう、「芸食-肉食」のカテゴリーは、家庭内で正月などのハレの日にとべるご馳走のたぐいであって、「民食-肉食」は、家庭内でまいにちとべる、ふだんの食事である。これらはむろん、あくまでも理想型であることを、おことわりしておかねばならない。

わが国における食生活史ないし食の文化史の研究は、これまでほとんどが芸食史であり、肉食史であった。肉食史といえ、もっぱら「芸食-肉食」の領域における民俗学の業績をかぞえるのみであっ

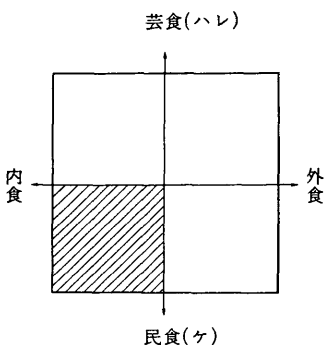


図1 食事文化の研究対象

た。「民食－内食」の領域は、記録も皆無にひとしい。研究もほとんど手つかずの状況にある。

われわれのめざす調査研究は、この「民食－内食」（図1の斜線部）の領域にわけていることをとおして、現代日本における家庭生活と家族関係のありようの変化を、実証的に追究しようとするものである²⁾。

1・2 調査のデザイン

“家庭らしさ”の典型として、だれしものがまっさきに想い浮かべる光景のひとつは、おそらく、茶の間（食事などをする部屋）で食事をしている場面であろう。家族のメンバーが一堂にうちそろい、食卓をかこんでいる情景である。

じじつ、わが国におけるテレビのホーム・ドラマを見てみると、食事の場面がやたらと多いことに気づく。あのお定まりの“団らんのシーン”というやつである。あれはたぶん、ひとつには、テレビの演出のうえで、登場人物を勢ぞろいさせるために、ぜひとも必要なシーンなのであろう。家族のメンバーがまいにち全員うちそろうのは、食卓をかこむときをおいてほかにはないからである。つまり、ホーム・ドラマにとって、茶の間における「食卓」こそは、もっとも重要な舞台装置なのである。

ひるがえって、われわれ自身の家庭にとっても、「食卓」がたいせつな装置のひとつであることに、かわりはない。共食の場が保たれているかぎり、家庭らしい雰囲気とまとまりは、失われることはないであろうからである。言いかえれば、食卓はわれわれにとって家庭らしさを演出するための、日常ドラマの舞台でもあるのだ。

かねてよりわれわれは、そんな「共食の場」を、家庭の研究にとって、もっとも具体的かつ重要なフィールドのひとつとして着目している。そして可能なかぎり生き生きととらえてみたい、と願いつづけているのである。

われわれの立場を、かりにカメラのたとえをもちいて説明してみよう。——われわれはいま、家庭の「茶の間」に広角レンズをむけ、「食卓」に焦点をあわせて、シャッターを切ろうとしている。するとフィルムには、家族のメンバーをまるごとふくむ「家庭」の情景の一コマが、写しだされることであろう。もしもある家庭を成立のときから断続的に撮りつづけることができるとするならば、そのあかつきには、一種の家庭の歴史が何さつものアルバムとなって記録されることであろう。

だが、実際問題として、シャッターを断続的に切りつづけることは不可能である。

2) 井上忠司, 1988, 「食卓の家庭史」『「家庭」という風景——社会心理史ノート』日本放送出版協会。

あらかじめシャッター・チャンス限定してかかる必要があるだろう。そこでわれわれは、さしあたり、わが国における食卓の3つの時代とその大きな“変わり目”——すなわち、「銘々膳（箱膳）」から「チャブ台」をへて、さらに「椅子式テーブル」にうつる時期——に場面をかぎって撮影し、家庭ごとの歴史の断面を素描してみたい、

表1 チェックリスト

家庭ではふだん（以下すべて同じ）、どのような形式で、どのように食事がなされていたか。 1. お膳（箱膳など）の時期 2. チャブ台（しっぽく台、飯台など）の時期 3. 現在（椅子式テーブルなど）の時期 の三つの段階にわけ、それぞれの時期ごとに聞き取る。	
1.2.3. A) 食事の形式と家庭環境について <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> どのような形式で食事がなされていたか （略図をつけること） <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> それを、実際には何と呼んでいたか <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> いつ頃からはじまり、いつ頃におわった （あるいは今もつづいている）か <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> その時期の家族構成は（被調査者からみて、 ただし使用人もふくむ） <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> その時期の住所は（区・町・村のレベルまで） <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> その時期の住環境は（商業地、工業地、住宅 地、団地など） <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> その時期の戸主の職業は（具体的に） <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 食事の形式が変化したとすれば、なぜか B) 食事をする部屋について <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 食事をする部屋のことを、何と呼んでいたか <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> その部屋は、食事以外でも何かに利用したか <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> その部屋の情景は（大きさ、調度など） C) どのようなすわり方で食べたか <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 座席の順番は（略図をつけること） <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> みんなそろって食べたか <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 食べる場所は（タタミ、板、土間など） <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 座ぶとんの有無（だれが使ったか） D) ご飯のほかには、何を食べ、何を飲んで いたか <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 朝 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 昼 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 晩 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> だれか特別にちがったものを食べていたか （たとえば、父親、長男など）	1.2.3. E) 食事のときのご飯の給仕について <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> だれがよそったか <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> よそう順序は <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 神仏へのお供えは <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 晩しゃくの有無 F) 食事のあとのかたづけについて <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 食べ終わったあと、すぐに茶わんや箸を湯茶でゆすいだか <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> いつ、だれが食器をさげた（はこんだ）か <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> いつ、だれが食器を洗ったか <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 洗った食器を、どこへ置いたか。また、しまったか G) 食器の共用について <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 共用の食器には、どんなものがあったか <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> それには、何が盛られていたか <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 箸箱は、いつ頃からあり、いつ頃からなくなった（ある は今もつづけている）か H) 食事中にしてはならないことについて <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 箸の上げ下ろしは <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 食べる順序は <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 食事のおしゃべりは <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 食事の姿勢は <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> そのほか、食事中にしてはならなかったことは I) 食事のあいさつについて <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 食べはじめは <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 食べおわりは J) 食事の話について <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> だれがおもに話していたか <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 何の話が多かったか

とおもう。と同時に、さまざまな家庭の情景をカメラにおさめることによって、おのおの家庭ごとの特殊性（個別性）と共通性（普遍性）を見いだしたい、とおもうのである。

さきに図1で示した「民食－内食」の領域の実態をとらえる目的にとって、もっともふさわしい調査の方法はなにか。記録文書のたぐいが皆無にひとしい以上、われわれはなんらかの“聞き取り調査”でカバーするしか、方法はあるまい。「銘々膳」から「チャブ台」へ移行した時期は、概して明治の末から昭和の初めにかけてであろうことが、予想されるのである。明治はおろか、大正でさえも、いまや遠くなりつつある。生き証人を求めて、われわれは急がねばなるまい。

——というわけで、高齢者を対象にした「家庭の食事にかんするライフ・ヒストリー調査」（以下、「食卓生活史の聞き取り調査」とする）が考案され、実施されるはこびとなった次第である³⁾。われわれのもちいた「チェックリスト」は、表1のとおりである（なお「基礎票」については、表3を参照されたい）。

調査の対象は、原則として、70才以上の女性とした。70才のかたでも、調査の時点（昭和58(1983)年の8月現在）で、すでに大正の初めごろのお生まれである。主として女性を対象として選んでみたのは、ほかでもない。茶の間にかんする話題ならば、たぶん、女性の記憶のほうが、詳細にわたるであろうとおもわれたからである。

調査には、われわれ共同研究者のつとめ先の関係大学（筑波大学、花園大学、甲南大学および奈良女子大学⁴⁾）の大学生諸君にあたってもらった。各調査者ごとに祖母などの身近な被調査者をひとり選んで、あとにのべるような要領で聞き取ってもらったものである。調査はおおむね、昭和58(1983)、59(1984)年の夏休みと、同59(1984)年の冬休みを利用しておこなわれた。

被調査者284名の内訳は、つぎのとおりである（表2）。明治生まれが197名、大正生まれが83名、そして昭和生まれが

表2 被調査者の内訳

生 年	人 数			
	男	女	計	
明治	~1911	20	177	197
大正	1912~1919	4	73	83
	1920~1925	1	5	
昭和	1926~1930	0	3	4
	1931~	0	1	
合 計		25	259	284

3) 井上忠司, 1988, 「前掲論文」。

4) 奈良女子大学については、故守屋毅氏（国立民族学博物館教授、当時奈良女子大学家政学部非常勤講師）のご協力を得たものである。あつく御礼もうしあげる。

表3 基礎票

記録者名

調査日 昭和 年 月 日 曜日

氏名（匿名可）

性別 男 ・ 女

生年 明治

 大正 年 （ 歳） （第 子）

 昭和

出生地 県 市 区

 府 郡 町

 都 村

生家の職業

現住所 県 市 区

 府 郡 町

 都 村

住所の変更とその年度

最終学歴

結婚はいつか 明治

 大正 年 （ 歳のとき）

 昭和

被調査者との関係（記録者からみて）

4名であった。対象の性と年齢に例外がみとめられるのは、調査者の身近なところで70才以上の女性が得られなかったためである。なお念のためにつけくわえておけば、ここでいう70才の人たちとは、大正2(1913)年前後に生まれた方がたのことである。

調査のすすめ方としては、原則として、調査者が「チェックリスト」の項目にしたがって、ゆっくりと質問していく。ただしその際に、まず「1.お膳(箱膳など)」の時期についてぜんぶを聞き取り、ついで「2.ちゃぶ台(しっぽく台、飯台など)」の時期、そして「3.現在(椅子式テーブルなど)」の時期と、それぞれ3つの段階にわたって、同じ質問を三巡りかえすのである。被調査者に自由に話してもらったままを、調査者がなるべく忠実に記録することは、いうまでもない。得られたデータは、調査者ごとに原稿用紙(400字詰)で15枚以内にまとめてもらうことにした。

つぎに紹介する一例は、明治28(1895)年生まれで、当時88才だった女性(M.Y.さん)のケースの一部である。その全文は、ほかの事例と同様に、巻末に紙幅の許すかぎり掲載しておいた。結局のところ、われわれは50例を選ぶことができた。選択にあたっては、被調査者の年齢(生年)や性、あるいは出生地や生家の職業などに、バラエティーをもたせようとつとめたつもりである。

1. 箱膳の時期(～大正2〔1913〕年 神戸市長田区N町)

A. めいめいに箱膳があつてな、その箱膳にはふたがあつて、そのふたを取つて、その上にお茶わん、箸、小皿なんか出しよつて食べたなあ。でもうちが百姓やさかい、お昼は、あがり口に腰掛けてお茶漬さらさらやつた。普通は箱膳なんて言わへんで、「お膳、出し」つて言いよつた。お膳つて言うただけでわかつたさかいな。そしてその箱膳は、たしか大正2年ぐらゐまでやわ。その時分、家にいたのは、両親と、兄が二人と、(一番上の姉は、私が子供の時分には、もうお嫁に行つて片づいていたやろなあ。大分、年が離れていたさかい。)そして二番目の姉と、私で計6人やつたやろなあ。その時期の住所は、今で言えば神戸市長田区N町で、当時はN村つて言うてな、農漁村やつた。

食事の型式が箱膳からちゃぶ台にかつたのは、そうやなあ、親の代から兄の代に代つたさかいやろか。大正2年に母が亡くなつて兄嫁さんが炊事をするようになったからなあ。なんせ兄嫁さんは、しっかりしていたから。

B. 食事をする部屋? そやなあ、茶の間とは言わなんだしなあ、やっぱり台所やなあ。そして台所では、食事以外なんもせえへんだ。大きさはなあ、さあ、細長くてな、畳敷きで板の間もあつて、まあ6畳ぐらゐやろか。その部屋にはなあ、

「膳戸棚」と言って、半間ぐらいの幅の開きがあって、開きの中の棚に箱膳を入れたなあ。その他に、土間に、どない言ったらええのかなあ、今の茶棚みたいなものがある、そこに他のものを入れたりしよったよ。水屋？水屋なんか、そんなものなかったでえ。百姓の家でそんなもん買うかいなあ。ああ、それから、へっついさんがあって、今で言うかまどやなあ、そして漬物の樽、その裏の障子をあけて、その外に井戸があって流しがあった。田舎の、大昔の家やさかいなあ、こんなこと言ってあんたにわかるかなあ。

C. 座席の順番はなあ、上座の右側から、まず父、長兄、次兄とすわって、向かい合わせるようにして、下座の右側から、姉、私とすわって、母が給仕をするさかい、台所に一番近いところに母がすわっていたわ（図2参照）。みんなそろって食べましたわ。座ぶとんね……、念頭になかったなあ。とにかく座ぶとんはお客さんのもんやと思ってたさかい普通はひかへんかった。

D. 朝は、みそ汁。うちは百姓やったさかいそれを憶えておいてくれへんかったらあかんでえ。そして漬もんぐらい。昼は、お茶漬けぐらいやないのお。晩は、この辺ならせいぜい、鯛の煮付けか、いかなごの炊いたのか、それと野菜の煮物が多なあ。「晩のおかずは、田んぼ行ってあれ取ってこうか」ちゅうようなもんや。また、浜の方から網を引き上げる声が、家までよう聞こえよった。そのたびに鯛やいかなごをようもらいに行ったわ。

父も兄も酒を飲まへんやったからなあ、特別に違ったものを食べるというのではなくてみんな同じものを食べよった。

E. 給仕は、母がやって、ご飯が炊けたらふたを取って、まず神仏へお供えをして、それから父、長兄、次兄、姉、私、そして母とよそった。

F. お茶を飲んで、それからお茶で茶碗をゆすいで、ふたをする、出したり、片づけたりするのは、母親やなあ。

時計は当時あったけどな、だいたい、田んぼへ行っていつ帰るといことは、おおよそわかるわいな。長年の習慣でな。だから、あの田んぼのあの仕事なら、これぐらいに帰ると思うたらな、家のものがその時期にあうように食事をこしらえて、そして田んぼから帰ってきて手をあろうたりしてる間に、もうちゃんにご飯が食べられるようにしとくの。それ式やったよ。

G. 箱膳やったさかい、共用の食器ちゅうもんはなかったわ。箸箱はなくて、箸は箱膳の中にそのまま入っていた。

H. 箸の上げ下ろしはあまり言わなかったなあ。もう当り前のことだから……。食

べる順序は、まずお汁を一口吸って、口をしめらすわけや、それからご飯とおかずを食べたなあ。食事のおしゃべりは行儀悪く、「黙って食べなはれ」と言われたなあ。食事中は正座して食べたよ。父も、兄も酒を飲まなかったさかい、あぐら組んで食べへんかったよ、全員が正座やわ。

また皿に入れてもらったものを残

す、すると「なんで残すねん、行儀悪い」と言われる。そやさかい、入れてもらった時にも好き嫌いを言うたらあかんねなあ。私、なすび嫌いであ、それがいやであ、つらかったわあ。

- I. 食べはじめは、何も言わず手を合わせてから食べる、「いただきます」なんて言えへんなんだ。食べ終わりは、同じく手を合わせて「ごっつおさん」やった。

(以下、省略)

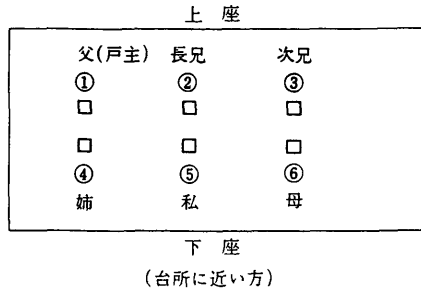


図2 箱膳の時期(～大正2(1913年))の座順

この「Ⅱ.食卓生活史の調査と分析」は、以下、2章と3・4章につづく。1つは「食卓生活史の聞き取り調査」にかんする量的な分析であり、もう1つはその質的な分析である。前者は、主として全体的な傾向をつかむことをめざしており、後者は、より具体的な内容の考察をめざすものである。食卓生活史の全貌は、両者が相補いあってあきらかにされていくことであろう。